

2022年度フィールドネット・ラウンジ企画

フィールドワークってなんだ？

—異分野方法論談議（霊長類学・言語学・歴史学・人類学）—

発表要旨

※本発表要旨の内容は、それぞれの著者の著作物です。

This abstract is copyrighted by each authors.

<霊長類学のフィールドワーク紹介>

積雪地のニホンザルのアカンボウはどのように冬を越すのだろうか？

谷口晴香（東京外国語大学 AA 研）

「積雪地のニホンザルのアカンボウはどのように冬を越すのだろうか？」。研究を始めたばかりのころ、そんな素朴な疑問を抱き、秋から春にかけて青森県下北半島で野生ニホンザルの調査をおこなうことにしました。まず、データを取得する前に、対象群（A87 群）のサルの顔を覚えることから始まりました。その後、観察対象のアカンボウのあとをついて歩き、なにを食べているのか、誰と共に過ごしているのかを調べました。じつをいうと、調査開始前は、雪のなかでアカンボウは母親にべったりとくっつき、ときおりなにかを食べるていどだろうと考えていましたが、そうでもありませんでした。「現場では、想像よりもおもしろいことがおきているなあ」と、感じる瞬間が好きで、今でもフィールドワークを続けているように思います。今後、人間を対象とした研究もしたいのですが、きっとサルのようにうしろをついて歩いたり、取得したデータを無邪気に公表したりすることには倫理的な問題があるでしょう。談議の場でお尋ねできたらうれしいです。

ニホンザルの声のやりとりを野外で調査する

杉浦秀樹（京都大学野生動物研究センター）

ニホンザルは「クー」という澄んだ声を出します。それを聞いた別の個体は「クー」という声を続けて出すことがあります。これは前の声に対する「返事」なののでしょうか？それとも、たまたま、2頭のサルが続けて声を出しているだけなののでしょうか？こんなことを考えながら、野生ニホンザルを対象に、野外調査を行ってきました。ニホンザルは室内で一人で暮らしているもの、野外の放飼場で群れの仲間と暮らしているもの、野生状態で暮らしてい

るもので、発声頻度は少しずつ異なっており、観察のしやすさも異なります。また、それぞれの場所で、使える研究方法も異なります。霊長類の音声を野外で調査することの利点や意味について考えてみたいと思います。また「研究上の利点」ということだけでは言い尽くせない魅力が、野生ニホンザルの調査にはあり、こういったことも野外調査の原動力になっているようにも感じます。時間が許せば、この点も考えたいと思います。

<言語学のフィールドワーク紹介>

彼らはどうやってその母音を発音しているのか —沖縄県宮古郡多良間村での器械音声学的調査—

青井隼人（東京外国語大学）

初めて沖縄県宮古郡多良間村に言語調査で訪れてから13年が経ちました。調査を開始した当初の私の関心は、当地の第6の母音の音声詳細でした。多良間村を含む宮古諸島の言語には、現代標準日本語の5母音（あ・い・う・え・お）に加え、もう1つ母音があります。この母音は、「い」と「う」の中間的な音色を持ちながら、[s][z]のような摩擦ノイズを伴って発音されることがあり、一体どのように発音されているのかが長らく謎に包まれていました。このトークでは、フィールドで発音を客観的に調べる手段にはどのようなものがあるのか、それらの結果からこの「第6の母音」がどのように発音されていると推測できるのか、をお話しします。

とりあえず行ってから考える

—ザンジバルでのスワヒリ語の方言調査—

古本真（東京外国語大学 AA 研）

私は、タンザニアのザンジバルという島嶼地域をフィールドとして、スワヒリ語の方言に分類される言語の調査をしています。言語学者の多くは、集めるデータや検証する問いを予め決めて、フィールドに向かうのかもしれない。しかし、私自身の経験を振り返ってみると、解決すべき課題というのは、フィールドに行ってからみつけることのほうが多かったような気がします。このトークでは、予期せず出会った言い方や表現のなかに人にいいたくなるような言語学的発見があるということを紹介しながら、言語学者が他分野の研究者に期待することや相談したいこと、また言語学者がほかの分野の研究に貢献できる可能性についてお話させていただきます。

<歴史学のフィールドワーク紹介>

イスタンブルで史料の海にとびこむ

守田まどか（東京外国語大学 AA 研）

イスタンブルは、今日、トルコ共和国最大の都市です。ここにはかつてオスマン帝国の都が置かれ、数世紀にわたってイスラーム教徒やキリスト教徒、ユダヤ教徒から成る多様な住民が共存していました。オスマン帝都イスタンブルで、さまざまな宗教を信仰する人々はどのようにつながり合いながら暮らしていたのだろうか？それを知りたいと学部生の頃から思いつづけ、現在に至っています。私がフィールド（＝イスタンブル）に行く目的は、この疑問を解く手がかりとなる史料を収集するためです。はじめて現地に長期滞在した十数年前から、ある史料群を通時的に調査しています。そこから何が見えてくるのかわからない、もしかしたら何も見えてこないかもしれないのですが、史料の山に向き合うとき、とてもわくわくします。現地での生活は、基本的には文書館や図書館にこもって、ひたすら文書史料と格闘する日々ですが、刻一刻と変化する現在のイスタンブルの様子を肌で感じたり、日常生活で現地の人々と関わったりするなかで、数百年前のイスタンブルとそこに生きた人々について史料をより立体的に読み解くヒントが得られることもあります。

<人類学のフィールドワーク紹介>

ケニアの聾者／聴者との民族誌的フィールドワーク〈私の場合〉

吉田優貴（東京外国語大学 AA 研）

文化人類学に出会ってから 30 年近く経ちました。途中、「私は人類学をしていると言えるのだろうか？」と思うこともしばしばあった私が、これまでの調査研究について具体的に話します。今回の話題は、(1) なぜわざわざ「私の場合」と言うのか？、(2) 私にとって「なぜケニアでフィールドワークしたのか？」という問いが無意味なのはどういうことか？、(3) 動画注釈アプリ ELAN による分析熱が下がったワケは？、(4) 助けてください！ケニア国立公文書館で複写した貴重な紙資料が未整理のまま紙クズになりそうです！の 4 つです。ケニアの聾者／聴者の中で暮らしながら、彼らの相互行為に着目して調査を行ってきましたが、ここ数年では、「主観」を外さずにどう研究していくかというのを課題の一つとしています。それを (1) と (2) で話そうと思います。(3) と (4) については、他分野の方にご意見をいただき、自分がこれからできることは何かを発見したいと思っています。